

## 講演

## ドイツ女性の現在と日本の印象

マリー-ルイーゼ・シュミット

皆様こんにちは。皆様の前でお話させていただきますことを大変光栄に存じます。私の故郷のドイツについて何をお話できるだろうか、と長く考えました。こちらは女子大学ですので、おそらくドイツ女性の職業と家庭生活に関心を持たれているかもしれない、と考えました。ドイツで最も重要な女性雑誌『ブリギッテ』(Brigitte)のアンケートによれば、若いドイツ女性にとって、職業、責任、親密な友人関係というものが同じように重要です。それは30年前には全く違っておりまして。まだ夫と家族が第一だったからです。

ドイツの女性は現在は当時よりも楽になっております。それどころか、今日女子や女性は学校や教育において男子や男性よりも楽であるかもしれない、と多くの女性が主張しております。私も成長期にあるふたりの息子の母親として、時々そういう印象を持ちます。小学校では原則的に女子のほうが良い点数を取ります。女子はしばしば男子より良く勉強しますし、おとなしいのです。コンピュータ・ゲームも女子は男子よりしません。ですから、男子よりも女子のほうが多数ギムナジウム<sup>1</sup>に進学することは不思議ではありません。男子よりも女子のほうが多数アビトゥーア<sup>2</sup>を取ります。研究と職業において若い女性たちが、以前は男性が占めていた領域に進んでいます。いわゆる「ガールズ・デー」(girl's day)<sup>3</sup>に若い女性は技術的な職業や典型的に男性的な別の職業を知るようになります。

若い男性には対応する日はありませんが、男性は職業分野の教育に関心を持つべきであるからというので、全力を尽くさねばなりません。以前は女性が不利な条件を負わされていたのですが、今は学校で男子が不利な目に合うことが増えています。学校で同じ記述式の成績に対して男子は悪い点数をもらう、という研究があります。

ドイツ女性は職業においてますます成功するにもかかわらず、しばしば自分のパートナーあるいは夫に、家族を財政上より強く援助することを期待します。そこで私たちは家族と職業の統一と言う困難なテーマに至ります。

子どもの誕生後、ほんのわずかな女性のみが即座にまた全面的に働き続けます。以前の共産主義的東部では、DDR<sup>4</sup>の時代に、乳児を託児所に預けて完全に働き続けることが普

---

1 アビトゥーアを取得できる高校。

2 ギムナジウムの卒業試験のことで、合格するとそれがそのまま大学進学資格となる。

3 4月の終わりごろのある1日を設け、女子が親の職場訪問をするなどして、職業の展望を広げていく取り組みを行っている。

4 Deutsche Demokratische Republik 旧ドイツ民主共和国、いわゆる東ドイツ。

通でした。ですから今日ドイツのこの部分（旧 DDR）にはほぼ十分な託児所があり、若い女性たちもそれを利用しています。西部<sup>5</sup>では託児所の数は、どの子どもも託児所に入れるよう増やされるべきです。そのために特に「家庭大臣」（Familienministerin）<sup>6</sup>ウルズラ・フォン・デア・ライエン（Ursula von der Leyen）が奮闘しています。私自身は、特に財政的な困難をかかえる若い女性のために、原則的にそれは良い理念である、と考えています。もっとも乳幼児は、専門的な心遣いではなく個人的な心遣いを与える固定した関係者を必要とする、と私は思います。ですから両親のうちのひとりあるいはいわゆる「子守」（Kinderfrau）ができるだけ幼児の世話をすべきでしょう。勿論それは財政上困難かもしれませんが。ドイツでは、家族はそれでも国家から財政上支援されています。

というのは、まずさしあたり「子ども手当」（Kindergeld）があります。第一子から第三子までのために家族は毎月157ユーロ（約23,550円）を、それ以降は子どもごとに176ユーロ（約26,400円）もらいます。若いパートナーが子どもを持つ決心を楽にできるように、最近国家は「親時間」（Elternzeit）を提案しています。これは男女の被雇用者に、自身の子どもに専念すると同時に職業とのつながりを維持する可能性を与えます。「パートタイム労働」（Teilzeitarbeit）への請求権を通して、父親もいっそう子どもの教育に参加する機会を得ます。この支援策は、両親とも仕事を持つことを要求しており、前提は両親のどちらかが週30時間以上は働かないということです。

両親の共通の「親時間」も可能です。「親時間」の最長期間は3年です。12ヶ月までの持ち分は子どもの8歳の誕生日までの時間に分けることができます。

「親時間」に雇用者は同意しなくてはなりません。もしも親の一方が完全に子どもの面倒を見る場合は、「親手当」（Elterngeld）は最高1,800ユーロ（約270,000円）になります。連邦共和国はこのために18億ユーロ以上を支出します。平均して申請者の10%は父親ですが、日常でそれを取るのは容易ではありません。このような父親は社会的承認を得にくいですし、同じ状況にある男性達との接触が不足しています。

ドイツの企業の58%は、フレキシブルで個人的に相容れる労働時間の提供を申し出ています。子どものための遊戯室を完備した家族友好的企業があります。大企業は、幼稚園および緊急時のためのケア・サービスを提供しています。「親時間」の後の慣らし勤務と継続教育は、雇用者の財政状況に依存しています。「パートタイム労働」はドイツではいまだキャリアに否定的に作用します。ですから多くの父親は「親時間」に入りたがりません。

男性と女性の肯定的な発展と法律的な平等にもかかわらず、同じ労働をする場合いまだに女性の方が安い給与ということが生じています。ますます多くの女性が指導的地位に昇進することを通して、それは確実にすぐ変わるでしょう。

5 統一ドイツ以前に Bundes Republik Deutschland ドイツ連邦共和国であった旧西ドイツのこと。

6 「連邦家族・高齢者・女性・青少年省」（BMFSFJ）の大臣の略称。

ドイツの子どもは3歳で幼稚園に行きます。幼稚園の開園時間は職業をもつ女性には必ずしも有利ではありません。13時までしか働かない人がいるのでしょうか？ ですから「小学校」(Grundschule)の児童も通える、午後の学童保育所があります。残念ながら学童保育所はまだ十分な数がありません。ドイツの学校はますます全日制学校になろうとしています、多くの場合に(女性には)十分な自由時間が提供されないままなのです。

職業における増大する権利の平等にもかかわらず、ドイツ女性がそれを私生活で持つのは容易ではありません。仕事の後もしばしば女性はひとりで家事と家族の世話をせねばなりません。女性と男性の間の釣り合いの取れた家事配分は、まだはるかに遠いのです。確かに多数の若い父親が子どもたちの世話をし、教育に参加しています。それどころか多くの父親が出産準備コースに通っています。学校の父母会の夕べの集いには、父親は原則的にギムナジウムで初めて行きます。

最後に私は皆様にもう少しここ日本での私の印象をお話したいと存じます。

私が3年前に東京に参りましたときに、日本の日常生活の中で多くのことが私には熟知したものに思われましたが、異国風に見えるものもありました。良く知っているものから始めましょう。子どもたちを幼稚園の迎えに行き、その後母親たちと一緒に遊び場で子どもたちを見ている若い女性のグループは、私の息子たちがまだ小さかったのを思い出させます。日本では、ドイツでのように女性が家族のお金を管理します。日本とドイツの女性は、献身的に通りを掃除しますし、大掃除を定まった時期に行います。ドイツと日本の女性はよく買い物をしますが、ただドイツの主婦は原則的に毎日買い物をするということはありません。

それでも私は一つの違いにただちに気付きました。日本女性はほとんど皆化粧をしています。非常に入念に趣味にあう身なりを整えます。ドイツでは多くの女性は、特に年配の女性は、あまり外見に関心を持ちません。ドイツの女性はしばしば男性に対して非常に自負心を持って対します。ドイツの男性は、妻からはほんのわずかしら褒められませんが、甘えさせてもらえません。私たちは夫あるいは恋人が病気のときには、彼のために浴槽に湯を張ります。ドイツ人の家族の父親が、日本人がするように仕事の後なお同僚たちと外出するならば、妻は非常に怒るでしょう。ドイツでは普通である週末の家族ハイキングは、ここでは習慣ではないようです。他者を自分の家へ招待するのも、私たちのところでは日常生活のうちなのですが、ここでは慣例ではありません。

肯定的に日本で目立ったことは、老人が親切に敬意を持って扱われていることです。それはドイツでは残念ながらむしろ稀です。日本人の購買力も私に強い印象を与えました。ここではドイツにおけるよりもずっと多くの贅沢な車があります。エレガントな洋服の店舗がしばしば満員です。ドイツの労働者は年に12ヶ月分の給与を受け取るだけなので、ドイツでは購買力はより少ないのでしょう。

私はまもなくドイツに帰国しなければならないということを意識して、今特に日常の友好的な交際と、日本人が仕事をするときの綿密さを楽しんでおります。刺繍やパッチワー

クのような工芸に非常に興味を持っておりますので、ここで私は素晴らしい買い物の可能性を見いだしました。ドイツへ材料と糸を持ち帰るつもりです。ただ私の帰郷の前にひとつ不思議を解く手がかりをつかみたいのですが、それは、なぜ日本人は自分の犬に着物を着せるのでしょうか？という問いです。

さて家族と職業におけるドイツ女性の状況、ならびに日本についての私の個人的な印象についてお話いたしました。皆様に興味深く感じていただけたのであればうれしく存じます。ご清聴ありがとうございました。

※2008年4月25日 女性文化研究所研究会での講演・掛川典子訳

(まりーーるいーぜ・しゅみっと 元駐日ドイツ外交官夫人)

(かけがわ のりこ 大学院生活機構研究科生活機構学専攻教授)